

「地域のため」の人材育成で大学の存在価値の向上を図る

聖泉大学

2009年度の文部科学省学生支援推進事業に選定された聖泉大学の「地域力循環型キャリア教育プログラム（Career learning in Local-power Circulation Program）」は、真の「地域貢献」とは何かを根底から考え直した結果、生まれた。地域と大学の間には築かれている新たな連携の形は、地元で活動する企業や団体、学生、受験生らの共感を呼んでいる。

地域活性化の責任を大学が負うという覚悟

聖泉大学は建学の精神に「地域貢献」を掲げ、卒業生の6~7割は滋賀県内で就職する。地域社会への貢献には以前から取り組んできたが、「地域力循環型キャリア教育プログラム（以下CLCP）」に取り組む有山篤利教授は、「このプログラムは学生と地域に対する不誠実さの反省からスタートした」と話す。地域に貢献する人材を育てると言いつつ、学生への指導は就職のテクニックが主であり、地域に具体的な成果を残していないのでは、という疑問、そして反省が原点にある。

きっかけは、ある地元企業の社長の「県内の多くの学生は滋賀から出て行く。どうか聖泉大学は地域に残る学生を育て、地域の活性化にひと役買ってほしい」という言葉だった。このとき、聖泉大学が行うべきキャリア教育について初めて本気で考えたという。

聖泉大学が所在する彦根市は、滋賀県東部の中核的な都市だが、長引く不況で製造業や商店街のかつての活気が失われている。地域が活力を失うと、

企業も若者も地域に残らなくなる。「本学の使命は、滋賀を支える人材の育成にある。滋賀県内、特に本学がある湖東地域に元気がなければ、それは本学の責任だ」という覚悟が必要だ」と有山教授は思い定めた。そこから「地域のために貢献する」という意識を持った学生を育てるキャリア教育への転換が始まった。

3年間の実践的教育を体系的に構築

CLCPは、「キャリア教育科目」という授業を通して行われる。

1年生はまず市民活動について学ぶ。無償かつ本気で地域づくりに取り組む「良き市民のロールモデル」と共に活動。受け入れ先団体の活動内容は、学童保育、清掃、屋形船の運行など、さまざま。活動内容についての事前学習、見学を経て、複数回の体験活動を行う。単なる研修ではなく、受け入れ先にもメリットをもたらすことを意図している。「自分で考えて行動できない学生には来てもらう必要はない」と、厳しい態度で接する受け

入れ先もある。学生にはおのずと「何をすれば少しでも役立つのか」といった意識が芽生えていくという。

2年生は「聖泉HSJ（Hop, Step, Jump）企画」という学内バーチャルカンパニーに参加し、「良き市民」としての資質を身に付ける。2010年度、2011年度は「聖泉CLCセミナー」を実施。

11月に2日間にわたって開く同セミナーの公開講座は、映画監督やプロスポーツチームのコーチなど、著名人だけでなく、高校教員、市民団体関係者、商店経営者、学生なども講師を務め、「学びのフリーマーケット」と銘打っている。2010年度は55講座を開き、1502人の受講者を集めた。2011年度は60講座、2000人が目標だ。「2012年度は、中小企業説明会の開催など、企業の活性化に取り組みたい」という声も、HSJ企画の学生から上がっている。

3年生は2年間の経験をふまえて企業で学ぶ。前期は受け入れ先企業の課題の解決に取り組む。2011年度は、寿司店の売り上げアップに向けたプロジェクトにチャレンジしている。後期は、県の中小企業家同友会の研修に参

加し、経営者との交流を深める中で、営利活動について学ぶ。

昔から地元に基づく「三方よし」を实践

これらの活動の根底を貫くのは、「学生が自分の夢を叶えるのではなく、地域社会や企業にどのような夢を与えることができるかを考える」というCLCPの基本精神だ。学生を「価値を消費する存在」から「価値を生産する存在」としての社会人に変身させるのだと、有山教授は解説する。

CLCPのコンセプトは、地元に基づく「三方よし」という近江商人の考え方に基づく。売り手と買い手がWin-Winの関係を築き、その結果、地域も豊かにするという考えだ。これを大学、企業や市民団体、地域社会に置き換えて捉えている。この考え方に賛同する教職員は少しずつ増え、CLCPを核としたジョブポリシー*の策定やカリキュラム改革が検討されている。

「滋賀の市民活動には聖泉大学が不可欠と言われることがCLCPの目標だったが、それは実現しつつある」（有山教授）という。ボランティアや市民活動などへの参加者を求める団体

の間では、「まず聖泉大学に相談したい」と言われることも少なくないようだ。実際に学生は、市民マラソン大会のボランティア、B級グルメ大会の出店スタッフなどにひっぱりだこという。学生と地域住民の距離が近づき、一つの目標に向けて力を合わせる気運が高まっている。

活動が次第に認知され口コミで共感が広がる

CLCP開始以降、学生は変わったという。学生同士や教職員との連帯感が強まり、ボランティアをはじめとする課外活動に積極的に参加するようになった。CLCPとは直接関係のないところでも学生と住民の交流も生まれている。学生の存在感が地域の中で次第に大きくなってきているという。

CLCPの活動は、聖泉大学と学生に対する地域の人々の見方を着実に変え、共感を集めつつある。CLCPに参画した企業、団体、個人の数を見ると、開始時の2009年度は延べ数で21だが、2010年度は120を超え、2011年度はさらに増える見通しだ。

受験生の間にも共感が広がっている。イベントの告知のために出身高校



現3年生は、地元の寿司店の売り上げアップに取り組んだ。写真は寿司店へのプレゼンの様子。

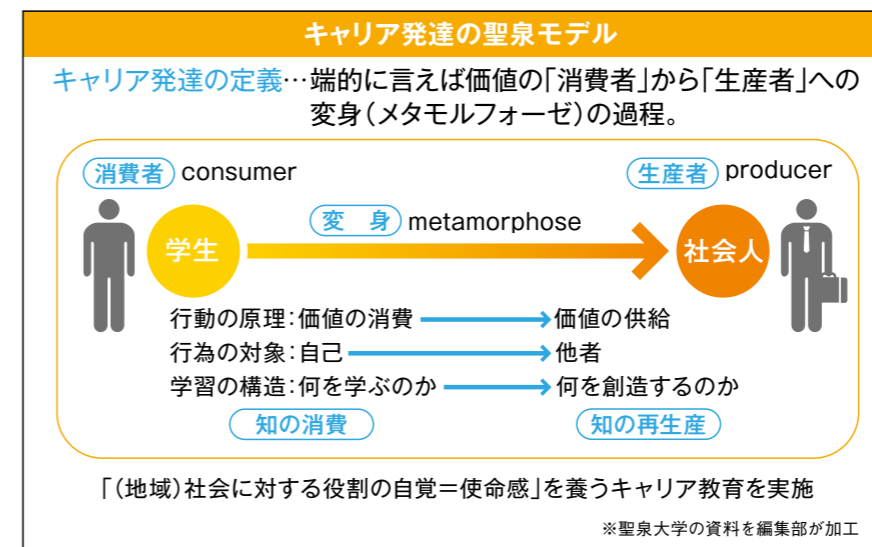
を訪れたり、後輩と会った際にCLCPの面白さを語ったりする学生も多い。オープンキャンパスで有山教授からCLCPの話聞き、興味を持って入学した学生もいる。このように広がった共感は、地域における大学の存在感を確実に高めている。

学生が地域での体験を繰り返すためには、地域の団体、企業との連携が欠かせない。地域に精通した人につなぎ役を担ってもらおうと、CLCPではNPO法人Linksの柴田雅美代表をスタッフとして迎えている。地元出身の柴田代表は、「地域としても、学生の力を生かしてきていないことに忸怩たる思いがあった。CLCPには住民の一人として心から賛同した」と話す。

柴田代表は学生を受け入れる企業、団体を探し、大学とつなぐ一方、自治体へも働き掛けを行っており、連携の輪が広がっているという。

現在、聖泉大学はCLCPを発展させる方向で、県全体を学びの場と見立てた「滋賀総キャンパス化」のプランをまとめ始めている。その成否は、これまで活動が及んでいない地域も含め、県内での共感をいかに集められるかにかかっている。

「学生が自分の夢を叶えるためではない」という一見逆説的な教育が、学生の成長を促し、地域との新たな関係を築き、大学を取り巻くさまざまな組織や人々とのつながりをより強くしつつある。



*職業人・社会人の育成方針